

2022 年度

高校生国際協力実体験プログラム

報 告 書

2022 年（令和 4 年）

7 月 27 日～7 月 28 日



独立行政法人 国際協力機構
九州センター（JICA九州）

<目 次>

1. はじめに	1
2. 高校生国際協力実体験プログラム報告	
【第1日目 7月27日】	
開 会 式	3
学校紹介・アイスブレイク	4
国際理解ワークショップ	6
JICA 海外協力隊活動計画づくり	8
国際交流パーティー	11
【第2日目 7月28日】	
JICA 海外協力隊活動計画発表、振り返り	14
閉 会 式	17
参 加 校 一 覧	18
ス タ ッ フ 一 覧	19
3. 添 付 資 料	
・ 高校生国際協力実体験プログラム募集要項	20
・ アンケート集計結果（参加生徒・教員）	29

1. はじめに

【事業の結果概要】

1996年よりJICA九州は、九州地区在住の高校生を対象に、開発途上国への理解を深めることを目的とした「高校生国際協力実体験プログラム」を実施しており、今回で26回目を迎えた。昨年度は、コロナ渦によりオンラインでの実施となったが、今年度は1泊2日の対面での開催となった。

本年度は、九州7県39校からの応募があり、応募書類に関しての選考を行い、7校を合格とした。結果、計31名（生徒24名、教員7名）が本プログラムに参加した。

参加生徒24名の内訳としては、1年生が6名、2年生が12名、3年生が6名で、男子が6名、女子が18名であった。

事前学習として、各県国際協力推進員が参加校を訪れ、JICA事業の紹介を行った。また参加する生徒達は、プログラム参加前の「国際協力」に関するイメージをウェビング^{*1}により記述した。

プログラムは7月27日と28日にJICA九州にて行われた。アイスブレイクで緊張をほぐした後、国際理解ワークショップ、JICA海外協力隊活動計画作り（元JICA海外協力隊員による体験談を含む）および計画発表、JICA研修員受入事業により各国からJICA九州に来訪している研修員との交流等を行なった。

生徒・教員に対するアンケートの結果からは、プログラムに対する満足度が高いことが伺えた。生徒達の意見としては、「外国や英語に対して、国際協力に対しての価値観が変わった」、「これから自分にできることは何かを考えて、実際に行動しようと感じました」などがあった。

プログラム全体を通しての参加者の評価は以下の通りである。

【アンケート結果】

・2日間を通してプログラムの内容の満足度は何%でしたか（生徒24名・教員7名）

満足度 (%)	100 以上	90 ~ 99	80 ~ 89	80 未満
人数	17 人	12 人	2 人	0 人

全参加者が80%以上の満足度を示しており、80%未満の回答は無かった。このことから、今回のプログラム内容が充実したものであり、参加者の期待に応えられていたことが伺える。

満足度100%以上の参加者の意見としては、「最初は不安だったが、最後は自信が付き、レベルアップできた」「これからのモチベーションの向上につながった」「学校では体験できない充実した2日間だった」などの意見があり、自分自身の成長、学びについての記述が多く見られた。

一方で、満足度が100%ではない理由として、「もう少し英語で交流したかった」「積極的に話せず少し後悔が残った」の意見があった。

その他、参加教員からの要望や改善点としては、「引率教師がすべての研修を生徒と受けるのではなく、一部は指導者養成講座のような教員向け研修があってもよかった」との意見が挙げられた。今後も今回の要望等を踏まえながら、より良いプログラムを実施していきたい。

※1 「ウェビング」

一つの題材・単語（本プログラムの場合は「国際協力」）を中心として、その題材から連想できるものを書き出していき、周りに網の目のように線でつなげていく方法。グループ内での各個人の意見を共有し、課題抽出や課題解決などの計画策定に用いられる手法。

2. 高校生国際協力実体験プログラム報告

【プログラム名】

開 会 式

担当： 仮屋 慶一（鹿児島県国際協力推進員）

鬼丸 武士（福岡県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ プログラムの開会をもって参加への意識を高める。
- ・ プログラムの目的および意義を確認することでより効果的なプログラムを目指す。
- ・ プログラム運営スタッフを紹介し、JICA 海外協力隊経験者の存在を認識する。

(2) 概 要

「高校生国際協力実体験プログラム 2022」を開催するにあたり、JICA 九州センター所長の吉成安恵が開会の挨拶を行った。JICA が実施している国際協力事業についての説明を行った後、本プログラムの意義、プログラム中だけでなく、事後もプログラムで得た気づきや学びを深めてほしいという参加者への期待を述べた。開会挨拶後、2日間を共に過ごすスタッフ（九州各県の国際協力推進員、(特活)九州海外協力協会職員）が自己紹介と本プログラムの流れ、2日間を九州センターで過ごすにあたっての諸注意を行った。



(開会挨拶の様子)

【プログラム名】

学校紹介・アイスブレイク

担当： 尾上 香織（熊本県国際協力推進員）

石川 洸（佐賀県国際協力推進員）

戸崎 千尋（長崎県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ プログラムの最初に参加者同士の交流を深め、お互いを知る。
- ・ 積極的参加の姿勢を自覚してもらう。
- ・ 自由な自己表現を引き出し、受け入れられる雰囲気作りを行う。

(2) 概要

<学校紹介（参加者自己紹介含）>

事前学習時に課題として伝えていた学校新聞を用い、各校1分30秒で参加者の自己紹介と学校紹介を行った。

<アイスブレイク>

SDGs パズルでのグループ分け、ネームトス、インプロの順番で、個々からグループ、最後には全員で交流するという流れで行った。目には見えないボールを次の人にパスをしながら自己紹介をするネームトスは、ただのボールだけではなく、魚やゴリラ、東京タワーなど様々なものをボールに見立てて投げることで、身体も動かしながら参加者同士の名前を楽しく覚えられるようにした。インプロは、出されたお題について1人1文ずつ「あいうえお」に沿って作文して繋げていく即興劇。自己紹介をしたグループで「学校での出来事」というお題に取り組んだ後、参加者全員で「JICA 海外協力隊」というお題に挑戦した。

(3) 参加者からの声

【生徒】

- ・ ただ単に自己紹介だけをするのではなく、体を使って何度も名前を呼び合ったのですぐに覚えられたし、とても楽しかった。
- ・ 一般的な自己紹介ではなく、ボールパスなどでとりあえず名前を呼んだり、アイウエオ作文をすることで自然と笑顔になり、コミュニケーションがとれたりしたと思う。無理に自己紹介をするよりも話しやすく、物語作りは大人数になっても楽しめるのでいいなと思った。
- ・ 周りの人とコミュニケーションをとることができて、その後のプログラムも円滑に進めることができた。

【教員】

- ・ 十分に交流することができましたが、学校紹介はもう少し時間をわけていただくとありがたいです。事前に課題として与えていただきましたので、事前学習の一環で

時間をかけてポスターを作りました。どの学校のポスターもかなり時間をかけて作っていらっしゃるようでしたので、少しもったいないように思いました。時間が限られていますし、研修のメインテーマではありませんので、ポスターセッション形式にしたらいかがでしょうか。

- ・ 最初は生徒たちも緊張していましたが、楽しいゲームで自然と発言もするようになり、あっという間にグループの他の方々のニックネームも覚えたようです。インプロでは若い人たちの発想力に感心しました。すごいですね。



(学校新聞を用いた学校紹介)



(SDGs パズル)

【プログラム名】

国際理解ワークショップ

担当： 石川 洸（佐賀県国際協力推進員）

飯屋 慶一（鹿児島県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ SDGsの多様なアクションを知る。
- ・ SDGsを実践し、伝えることの大切さを知る。
- ・ ワークショップを通し、初めて会う人とのコミュニケーションを取りながらオーディエンスを惹きつける発表を体験する。

(2) 概要

1) SDGsの企業実践事例を学ぶ

アイスブレイクで行ったJICA地球ひろば制作の「SDGsラップ」をはじめ、JICA、民間企業が実施するSDGsの実践事例を映像や資料を通して紹介。また、実践に留まらずSDGsを周囲に広めること・伝えることの大切さを学んだ。また、吉本興業が作成している動画を例に提示し、色んな表現手法があることを紹介。

2) S-1グランプリ

SDGsに関連した漫才づくりを実施。推進員が漫才のお手本を見せ、コンビ名づくり、ネタ作り、そして作ったネタを披露する場として漫才大会「S-1グランプリ」を実施。12組が参加し、1分以内の漫才を披露。JICA職員及び推進員計3名による審査の結果、チャンピオンを決定。但しS-1チャンピオンを決めることが本来の目的ではなく、SDGsを楽しく伝えることの大切さを漫才というツールを通して体験してもらう狙いがあった。

(3) 参加者からの声

- ・ 伝えるまでが大切と感じた。
- ・ レポートや読み物だけではなく漫才やラップなど様々な形があり、決まった形はないんだと感じた。
- ・ 漫才だとどんな人にも伝わりやすいし面白いのでとても魅力的だと思った。
- ・ 漫才は恥ずかしかったが、楽しかった。
- ・ SDGsの理解度がコンビにより差があったので、テーマを設定した方がよかった。
- ・ 初めての経験で緊張したが、他校の生徒と仲良くなれた。
- ・ 学校でもSDGsと何かワクワクすることを繋げた取り組みをやってみたい。



(SDGs の多様なアクションを知る)



(SDGs に関する漫才づくり)



(S-1 グランプリ)



(S-1 グランプリ 結果発表)

【プログラム名】

JICA 海外協力隊活動計画づくり

担当： 戸崎 千尋（長崎県国際協力推進員）

井本 望（大分県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ JICA 海外協力隊になりきり、村をより良くするための活動計画を立てる。
- ・ 現地の人々にとって本当に必要な支援とは何かを考える。
- ・ 現地の人々を巻き込んだ計画を立て、現地の人に向けた発表ができるよう計画策定する。

(2) 概 要

【設 定】

架空のウエストティモール国バリボ村でコミュニティ開発隊員として派遣される設定で、国の情報から現地の課題や問題点を洗い出し、グループに分かれ2年間の活動計画を立てる。活動内容の要請は「現地の伝統や文化を尊重しながら、ともにより良い村づくりに協力すること」である。

【導 入】

プログラム全体の説明を行い、「JICA 海外協力隊とは」「職種（コミュニティ開発）について」「発表ルール」「評価項目」について説明。その際、「JICA 海外協力隊になりきって」、課題解決のための活動計画づくりに取り組んでいくことを強調して説明。

派遣されるウエストティモール国バリボ村の概要を把握するため、地図で場所を確認し、写真で村の様子を見ながら気づきをグループ内で共有する。（フォトランゲージ）

【JICA 海外協力隊の活動事例紹介】

発表者：JICA デスク佐賀 国際協力推進員 石川 洸（セネガル / コミュニティ開発）

【村の情報分析、課題抽出、優先順位づけ】

バリボ村の概要を読み込み、良い点や問題点を洗い出し、グループで共有。

ダイヤモンドランキング手法を用い、グループ内で課題事項の優先順位をつけ、課題解決のためのアイデア出し、良い点をさらに良くするためのアイデア出しを行う。

【活動計画作成】

活動の対象者・協力者・活動内容の仮決めをし、「村の現状（課題）」「目指す村の将来像」を意識した活動計画の骨組み作り。

【JICA 在外事務所（企画調査員）の配置】

JICA 海外協力隊の良き相談相手としてボランティア業務のサポートをする企画調査員（ボランティア事業）を配置。JICA 九州の職員 2 名（野路・森川）の協力のもと、学生の活動計画作成中の質疑に対応した。

（3）参加者からの声

【生徒】

- ・ 同じような思いを持った高校生と話し合うのは、やはり学校でするよりも白熱して楽しいと感じた。
- ・ 問題点はいくつも挙げるができるけど、いざ解決策と言われると根拠を持って導き出すことが難しく、その解決策の妥当性を考えると適していない案もあって、たくさん頭を悩ませた。しかし、その分グループで話し合いができ、交流もできて良かった。
- ・ 写真だけの情報ではっきりわかるわけではないが、問題点や良い点を挙げたあとに解決策やさらによくする点を考え、優先順位を立てていく手法は、これからの様々な場面で役立てていくことができると思った。
- ・ 自分の意見だけではなく、他人の意見を取り入れながら進めることができたのが良かった。それに伴い、新たな知識と意見を出すことができた。
- ・ 考えていた何倍も何十倍も難しいと思った。海外の問題は解決策が見つかってもお金や人の関係で解決できなかったり、住人が継続するのが難しかったりと周りの環境が影響していて、なかなかすべての条件を満たす解決策が出なかった。

【教員】

- ・ 自分の学校で半年以上かけてやることを 2 日間で取り組む生徒たちに驚きました。だからこそ、深め広げていく道を考えて行こうと思います。
- ・ 計画を立てる流れがスムーズで参考になりました。課題研究に活かそうと思います。
- ・ 目的、場面、条件が細かい資料により明示されていたので、生徒にとってはゴールイメージがしやすい活動であったと思います。
- ・ 1 対全員というクラスルーム形式よりも、1 対少数・多グループ形式の方が良いのではないかと思います。少数の方が生徒は集中できますし、ざっくばらんに質問もできるのではないかと思います。5 名の経験者がいらっしまったので可能ではないかと思いました。
- ・ フォトランゲージやダイヤモンドランキングなど、グループ活動で効果的な手法について学ぶことができました。



(導入説明)



(村の写真をもとにフォトランゲージ)



(グループ発表)



(村の良い点・情報分析、課題抽出)



(企画調査員への相談)

【プログラム名】

国際交流パーティー

～研修員の国・文化を知り、世界の料理を味わおう～

担当： 鬼丸 武士（福岡県国際協力推進員）

尾上 香織（熊本県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ 研修員との交流を通して異文化への理解を深める。
- ・ 十分に言葉が通じない相手とのコミュニケーションを体験し、コミュニケーション能力を高める。
- ・ 相手を理解しようとすることの大切さや意義に気づき、日常生活へも通じることに気付く。
- ・ 世界各国の食卓事情や料理を味わうことで、食文化の違いを理解する。
- ・ 日本食を紹介することにより自国の食文化を振り返る。

(2) 概要

新型コロナウイルス感染拡大に留意し、黙食にて食事を終えたのち、全体でアイスブレイクを行った後、JICA 研修員 1 名が高校生の各グループに入り、自己紹介や研修員の国の食についての事情調査及び発表を行った。

【参加研修員】

- ・ 長期研修員（九州工業大学、北九州市立大学、早稲田大学九州キャンパス）8 名（タイ、インドネシア、ルワンダ、エチオピア（2 名）、ソロモン諸国、アゼルバイジャン、フィリピン）

【流れ】

- ・ プログラムの趣旨を説明
- ・ 研修事業、JICA 研修員について動画を通して概要紹介（YouTube『研修員受入事業 60 年－日本の経験・知見を伝える－ダイジェスト版』）
- ・ 夕食（エスニック料理の弁当）のメニュー紹介
- ・ 全体での JICA 研修員紹介
- ・ 全体でのアイスブレイク（キャッチゲーム、拍手でグループ作り）
- ・ グループに分かれて各自の自己紹介
高校生：名前、出身県、年齢（学年） 研修員：名前、出身国、職業
- ・ 研修員の国の食事情調査 テーマ：よく食べている料理
該当する料理について、材料や作り方、食べ方等に関して JICA 研修員にインタビューする。聞き取った内容を高校生が模造紙にまとめ、全体に発表した。
(研修員 1 名につき各班 1 分半で、全グループが英語で発表した。)

- ・ 終了後、研修員を交えて集合写真を撮影し、研修員のお見送りをした。

(3) 参加者からの声

【生徒】

- ・ どの研修員さんもととてもやさしく接して下さり、自分の話す力の向上に好影響したと思う。異文化理解をすることが大切なんだと改めて感じた。
- ・ リモートでやると思っていたので、とてもうれしかったです。やはり現実でコミュニケーションをとれるのは良いです。
- ・ はじめのミニゲームでは言葉をかわさなくても楽しく遊べたし、お互いにルールが理解しやすく遊びやすかった。英語で質問して、発表準備をする際には、研修員の方も一緒に作ってくれた部分もあったし、質問した時や相手の国の話をしている時も楽しそうにしてくれていたのも私も楽しく、笑顔で活動できた。
- ・ せっかくの英語でコミュニケーションがとれる時間なのに、時間が短く話したりない。3時間くらいで、プレゼンテーション有りにしたら、もう少しゆとりのある会話が出来ると思う。

【教員】

- ・ 生徒が楽しめているのが一番です。お一方ではなく、お二方ほど交流できるともっと良かったかなと思いました。(時間の都合もありますが)。
- ・ 大変お忙しいであろう研修員さんにおいで頂き、とても有難く思いました。外国人と接触する機会が極端に少なくなっているご時世で、非常にレベルの高い交流になったと思います。
- ・ アイスブレイクからのグループ別の活動へとスムーズに移行できていた。グループ内の活動もうまく構成されており、充実していたと思う。研修員ごとの個性に触れながら国際理解を深めることができていたように思われる。



(JICA 研修員に関する説明)



(エスニック弁当を黙食)



(アイスブレイクの様子)



(研修員の国にインタビュー)



(英語で全体発表する)



(JICA 研修員との集合写真)

【プログラム名】

JICA 海外協力隊活動計画発表、振り返り

担当： 井本 望（大分県国際協力推進員）

戸崎 千尋（長崎県国際協力推進員）

(1) ね ら い

< JICA 海外協力隊活動計画発表 >

- ・ 大勢の人に対し発表する経験を通じ、自分の考えを伝えること、人の話を聞くことの大切さに気付く。
- ・ 他のグループの発表や意見を聞くことで自分にはない視点を知り、国際協力に対する理解を深める。

< 振り返り >

- ・ 2日間のプログラムを多角的に振り返ることで学びを整理する。

(2) 概 要

< JICA 海外協力隊活動計画発表 >

まず、発表に関する注意事項（1グループ10分以内で、内訳は発表6分、質疑応答3分、移動1分。また、全員が発表に参加し、発表対象は現地の村人であること。）を重ねて確認した。続いて、投票は評価シート（評価項目は、実現可能性・妥当性・持続性・独自性（プレゼン・表現力を含む。）の4つを5段階で採点。）を基に行うことを重ねて確認した。

活動計画の発表は、7グループ（教員1グループ・生徒6グループ）が順番に行った。なお、教員グループは評価・投票の対象外とした。最終的に、上位2グループを表彰（最優秀賞・優秀賞）した。入賞した2チームへはJICA九州・吉成所長より記念品が贈呈された。加えて、最優秀賞を受賞したグループの発表内容については、後日、JICAデスク佐賀のラジオ番組にて生徒のコメントとともに紹介された。

最後に、JICA九州・市民参加協力課・齋藤課長より講評が行われた。

< 振り返り >

まず、各校教員より、生徒発表を見て、今の気持ち・気付きや感想等を1分程度ずつで共有いただいた。

その後、発表グループ毎で10分間、次に学校毎で20分間の時間を取り、2日間のプログラムを振り返った。前者では、発表グループ毎で過ごす時間はこれが最後になることから、「仲間に気持ちを伝える時間」の位置付けで、気付き・学びや感想等をグループ内で伝え合った。

後者の学校毎では、事前学習で作成したウェビング（お題：「国際協力」）を基に、2日間を通して得た新たな学びについて、追加で書き足していくワークを行った。その後、本プログラム参加前後を比較し、自分自身の変化・考え方の変化・新たな学び等をグループ内で共有した。最後に、各校リーダーが代表で、全体に対して、プログラムの感想や学び

を共有し、締め括りとした。

(3) 参加者からの声

< JICA 海外協力隊活動計画発表 >

【生徒】

- ・ 話す内容を考える時にも、皆でアイデアを出して、表現や仕草などに工夫をこらしました。また、全グループの発表が終わってから、どの発表にも質問があり、それが発表をより明確にしている、質問の大切さに気づきました。
- ・ 似たようなテーマでも解決の方法が班ごとにそれぞれ違って、思いつかない発想や取り組みを教えてもらったことで一つの物事でも取り組み方は無限大なんだ！と思うことができ、自分の考えの範囲も広がったように感じました。
- ・ 短時間で内容をまとめて練習までして準備を行うのは大変だったけれど、グループ内でもたくさん話をして変更しながらも満足のいく発表ができたと思う。他のグループの発表を見ることで自分の改善点や興味を引く発表の仕方を考えることができた。
- ・ 他校の生徒のアドリブや説得力、語彙力、適応力に驚き、自分の力不足や経験の少なさを実感できた。

【教員】

- ・ 学校単位でなく混成チームによる計画作成・発表で、他校生と交流したり刺激し合えたのがとても良かった。他者と協力して一つのことに取り組むことの難しさを乗り越え、新しい視点やアイデアを共有できたのではないのでしょうか。
- ・ 審査に多くの方々がいらっしゃって、高校生の持続可能な開発教育への熱意が生徒にも私たち教員にも強く伝わってきました。質問された内容も青年海外協力隊などご自身が経験されたことを踏まえていらっしゃったので、大変勉強になりました。



(図書館で調べ学習)



(発表練習の様子)



(活動計画発表の様子)



(ウェビングに追加記入)

【プログラム名】
閉会式

担当： 仮屋 慶一（鹿児島県国際協力推進員）
鬼丸 武士（福岡県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ 閉会あいさつをもらい、本プログラムの締めをする。
- ・ 事後学習への取組を呼び掛け、各県の国際協力推進員と継続した連携をもてるようにする。

(2) 概要

閉会式では、JICA九州・守屋次長が閉会あいさつを行い、プログラム参加への謝辞や、今後の取組への期待を述べた。その後、スタッフを含めた全員で写真撮影を行い、2日間の締めくくりを行った。



(閉会式の様子)



(集合写真)

2022 年度 高校生国際協力実体験プログラム 参加校一覧

＜7月27日（水）～7月28日（木） 生徒24名、教員7名 計31名＞

	県	立	高等学校名	生徒	1年	2年	3年	男	女	教員
1	福岡	県立	鞍手	4	2	2			4	1
2	佐賀	県立	唐津東	4		4		1	3	1
3	長崎	県立	佐世保商業	2			2		2	1
4	熊本	県立	翔陽	3	1	2		1	2	1
5	大分	私立	大分	4			4		4	1
6	宮崎	県立	延岡	4		4		4		1
7	鹿児島	私立	大口明光学園	3	3				3	1
小 計（人）				24	6	12	6	6	18	7

プログラム実施スタッフ一覧

	所属	名前	任国	職種
1	福岡県国際協力推進員	鬼丸 武士	中東・ヨルダン	理学療法士
2	佐賀県国際協力推進員	石川 洸	西アフリカ・セネガル	村落開発員 普及員
3	長崎県国際協力推進員	戸崎 千尋	アジア・スリランカ	高齢者介護
4	熊本県国際協力推進員	尾上 香織	大洋州・トンガ	音楽
5	大分県国際協力推進員	井本 望	中南米・セントルシア	青少年活動
6	鹿児島県国際協力推進員	仮屋 慶一	アジア・モルディブ	体育
7	(特活)九州海外協力協会	羽生 志穂	西アフリカ・セネガル	小学校教育

3. 添付資料

高校生国際協力実体験プログラム募集要項

International Cooperation
高校生だけの限定プログラム

JICA九州

高校生国際協力 実体験プログラム

2022

開催日
7月27日水
~28日木

— 応募締切 —
5月20日金
【必着】

「この夏、キミは
JICA 海外協力隊になる！」

DISCOVERY

SUMMER VACATION

！ 新型コロナウイルス対策の状況に応じて、参加人数の制限や実施方法がオンラインに変更になる可能性があります。最新の情報についてはJICA九州のホームページにてご確認下さい。
<https://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/jittaiiken/index.html>

主催：独立行政法人 国際協力機構 九州センター
後援：福岡県教育委員会 佐賀県教育委員会 長崎県教育委員会 熊本県教育委員会
(予定) 大分県教育委員会 宮崎県教育委員会 鹿児島県教育委員会
福岡市教育委員会 北九州市教育委員会 熊本市教育委員会

独立行政法人 国際協力機構 JICA

世界・仲間・自分、発見！

九州各地の高校生たちと
世界を感じる2日間！

「JICA九州 高校生国際協力実体験プログラム」は九州各県から集まった仲間が1泊2日を共にし、世界と自分とのつながりを体感する、高校生のための国際協力入門講座です。

プログラム

事前学習

●各校にて実施します

「国際協力」
ってなんだろう？

「実体験プログラム」への参加前に、各地の国際協力推進員と一緒に国際協力について考えてみよう。

DAY1

多様な文化に触れる

九州各地から集まった仲間たちと親睦を深め、JICA海外協力隊経験者との交流や世界の料理を楽しもう！

Time Table (予定)

10:00～ 開会式 (10分)	13:30～ 計画作り (210分)
10:10～ アイスブレイク、自己紹介 (40分)	17:00～18:00 チェックイン
10:50～ 移動	18:00～ 夕食・交流会(120分)
11:00～ ワークショップ (90分)	20:00 終了
12:30～13:30 昼休み	

・アイスブレイク・



・ワークショップ・



・計画作り・



SUPPORT STAFF

JICAボランティア経験者である各デスクの国際協力推進員たちが、プログラム全体をサポートします。

JICAデスク 福岡

(公財)福岡よかトピア国際交流財団内
福岡市博多区店屋町4-1 福岡市国際会館1F
TEL 092-262-1714
jicadpd-desk-fukuokashi@jica.go.jp

JICAデスク 佐賀

(公財)佐賀県国際交流協会内
佐賀市白山2丁目1番12号 佐賀商エビル1階
TEL 0952-25-7921
jicadpd-desk-sagaken@jica.go.jp

JICAデスク 長崎

(公財)長崎県国際交流協会内
長崎市出島町2-11 出島交流会館1階
TEL 095-823-3931
jicadpd-desk-nagasaki@jica.go.jp

JICAデスク 大分

(公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団
おおいた国際交流プラザ内
大分市高砂町2-33 iichiko総合文化センターB1F
TEL 097-533-4021
jicadpd-desk-oitaken@jica.go.jp

JICAデスク 熊本

(一財)熊本市国際交流振興事業団
熊本市国際交流会館内
熊本市中央区花畑町4-18 熊本市国際交流会館2F
TEL 096-359-2130
jicadpd-desk-kumamotoshi@jica.go.jp

JICAデスク 宮崎

(公財)宮崎県国際交流協会内
宮崎市橋通東4-8-1 カリーノ宮崎地下1階
TEL 090-7167-4230
jicadpd-desk-miyazakiken@jica.go.jp

JICAデスク 鹿児島

(公財)鹿児島県国際交流協会内
鹿児島市山下町14-50
かごしま県民交流センター1F
TEL 099-221-6624
jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp

事前に知っておこう!

JICA (ジャイカ) とは?

JICA (国際協力機構) は、日本政府の開発途上国へのODA (政府開発援助) を行う組織です。

JICA 海外協力隊って?

JICAが実施する海外ボランティア派遣制度です。開発途上国で現地の人たちと生活を共にし、貧困や環境など、その国の抱える課題に取り組みます。

JICA 九州とは?

JICAの九州における国際協力の拠点です。開発途上国から日本の技術を学びに来た人たちのための研修施設もあります。

2DAY PROGRAM

DAY2

JICA 海外協力隊になる

JICA海外協力隊になりきって、自分に何が出来るか考えて発表してみよう。現地の人たちに本当に必要とされる支援って何だろう?

Time Table (予定)

- 9:30~ 計画作り・グループ内まとめ (150分)
- 12:00~13:00 昼休み
- 13:00~ 計画発表(120分)
- 15:00~ 振り返り(30分)
- 15:30~ 閉会式・写真撮影(20分)
- 15:50 終了

※プログラムの内容や時間は変更する場合があります。

計画発表



事後学習

●各校にて実施します

自分の変化も
伝えよう!

「実体験プログラム」で感じたこと、考えたことを表現し、周りの人に伝えよう。

最後に記念撮影! 夏の良い思い出となりました。

記念撮影



新型コロナウイルス対策の状況に応じて、オンライン開催となる可能性がございます。

2021年度はオンライン開催でしたが、各県会場での活動とオンラインでの活動を組み合わせることで、楽しく充実したプログラムとなりました!



2021年度の様子

JICA九州 高校生国際協力 実体験プログラム

2022

グローバルな人材を育てる参加型の「学び」

- [国際理解] 世界の状況や国際協力の現状に気づき、理解を深める
- [SDGsへの理解] ワークショップを通じ、理解を深め、自分たちが身近にできることを考える
- [交流] 参加者や協力隊経験者との交流を通じ、国際協力にどう関わることができるかを考える
- [進路 / 生き方] 様々な生き方・経験に触れることで自分自身を見つめなおし、将来の進路選択に役立てる

日程

7月27日(水) ~ 28日(木) ※開催は1回のみ

プログラムの流れ

事前学習 6~7月に国際協力推進員が各校を訪問し事前学習を実施します。日程など詳細については各地の国際協力推進員にご相談ください。

本プログラム 2日間の全日程にご参加ください。

事後学習 例年の参加校はプログラム終了後、学校行事や各地の国際交流・国際協力イベントなどで、本プログラムの成果を発表しています。また、参加した経験を活かした「JICA国際協力量生・高校生エッセイコンテスト」への応募も推奨しています。詳細は各地の国際協力推進員にご相談ください。

会場

独立行政法人 国際協力機構九州センター(JICA九州)

福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1 (JR鹿児島本線八幡駅下車徒歩12分)
TEL093-671-6311 (代表) www.jica.go.jp/kyushu
※新型コロナウイルス対策の状況に応じてオンラインに変更となる可能性があります



参加条件

- 国際理解教育・持続可能な開発のための教育(ESD)・キャリア教育に積極的に取り組んでいる学校、又は今後取り組む意欲がある学校。
- 学校長より参加の許可が得られること。
- 生徒の保護者より参加への同意が得られること。
- 生徒が過去に本プログラムに参加していないこと。
- 教員・生徒とも、事前・事後学習を含み、全プログラムに参加可能なこと。選考後の参加者交代は不可。

募集数

- 九州7県から最大7校
- ※1校につき、生徒2~4名(+教員1名)での参加を基本とします。参加希望校が定数を越えた場合は、応募書類、県のバランス、新規希望校の優先等を考慮して選考します。
- 最少開催人数:14名

留意事項

- プログラム参加費自体は無料となります。
- 昼食および夕食代は各自でご負担ください。
- 学校所在地からJICA九州までの往復交通費、宿泊費はJICA九州が負担します。
- お車での来場はできません。公共交通機関をご利用ください。
- プログラムへの参加に当たり、参加者全員、国内旅行傷害保険にご加入いただきます。同費用はJICA九州が負担します。万一事故が生じた場合、保険の給付範囲内で補償いたします。
- 宿泊先はJICA九州宿泊棟となります。
- 動きやすい衣服での参加をお願いします。
- 個人都合(部活等)によるキャンセルはご遠慮ください。
- 筆記用具、健康保険証の写し、および緊急時の連絡先をご持参ください。

新型コロナウイルス対策の状況に応じて、参加人数の制限や実施方法がオンラインに変更になる可能性があります。最新の情報についてはJICA九州のホームページにてご確認下さい。

<https://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/jittaiiken/index.html>



応募方法

参加申込書をJICA九州ホームページよりダウンロードし、必要事項をご記入の上、以下の送付先まで郵送ください。

[<https://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/jittaiiken/index.html>]

送付先

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1 JICA九州内(特活)九州海外協力協会

応募締切 2022年5月20日(金) [必着] ▶ 2022年6月15日(水) 迄に結果通知

2021年度参加校実績

福岡県 北九州高等学校 熊本県 熊本農業高等学校 宮崎県 飯野高等学校
佐賀県 佐賀西高等学校 大分県 大分西高等学校 鹿児島県 志学館高等部
長崎県 長崎明誠高等学校

(学校用)

JICA 九州高校生国際協力実体験プログラム参加申込書

参加日程	7/27~7/28		
ふりがな			
高等学校名	立		高等学校
学校住所	〒		
	TEL		FAX

引率教師	ふりがな		担当		性別	男
	氏名		教科		別	女
	現住所	〒				
		TEL		FAX		
E-Mail			携帯			
生徒1	ふりがな		TEL			
	氏名		学年	年生	性別	男/女
生徒2	ふりがな		TEL			
	氏名		学年	年生	性別	男/女
生徒3	ふりがな		TEL			
	氏名		学年	年生	性別	男/女
生徒4	ふりがな		TEL			
	氏名		学年	年生	性別	男/女

学校所在地から JICA 九州までの交 通経路	(バスを使用される場合は、運賃と会社名をご記入ください)
	学校最寄 ()線()駅、または()バス会社 ()バス停→ →JICA 九州

※公共交通機関をご利用ください

上記の者が、JICA 九州の「高校生国際協力実体験プログラム」に参加することを承認します。	
高等学校名	日時 2022年 月 日
学校長	印

【個人情報の取り扱いについて】

参加のお申し込みを通じて入手した個人情報は、本プログラム実施に係る業務のみに使用いたします。また、当該情報は当機構にて厳重に管理し、正当な理由なく第三者への開示、譲渡及び貸与することはありません。

送付先: 〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1 JICA 九州内

参加申込書

独立行政法人 国際協力機構

九州センター 所長 殿

独立行政法人国際協力機構 九州センター主催「高校生国際協力実体験プログラム」の募集要項の内容について承諾し、同プログラムに参加を申し込みます。

併せて、引率に当たっては、①九州センター在館期間を通して消灯・点呼を初め生徒の生活指導に当たること、②生徒のプログラムや JICA 関係者との意見交換にも積極的に参加すること、③申し込み後の引率者変更をしないことについて承諾します。

なお、旅費については下記の口座^(※)にお振込願います。

^(※)口座は学校の公金口座または引率教師の個人口座のどちらでも構いません。

年 月 日

氏 名 : _____

生年月日 : _____ 年 月 日 年齢: _____ 歳

振込口座

銀行名		支店名	
口座番号	普通・当座		
ふりがな			
名義人			

(生徒保護者用)

参加申込書

独立行政法人 国際協力機構

九州センター 所長 殿

独立行政法人国際協力機構 九州センター主催「高校生国際協力実体験プログラム」の募集要項の内容について承諾し、同プログラムに参加を申し込みます。

年 月 日

申込者氏名 : _____

生年月日 : _____ 年 _____ 月 _____ 日 年齢: _____ 歳

親権者または

保護者名 : _____ (印)

本人との続柄 : _____

【参加にあたり心配事がある方のご記入ください(健康面、アレルギー等)】

※選考には影響ありません

2022 年度 高校生国際協力実体験プログラム アンケート

1 日目（生徒用） 回答者数 23 名

[学校紹介・アイスブレイク]

満足度

(人)

満 足	22
やや満足	1
やや不満	0
不 満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 緊張していたが、アイスブレイクを通して名前を覚えられたので良かった。最初に学年を言わなかったため学年を超えた交流ができた。
- ・ 一般的な自己紹介ではなく、ボールペンパス、あいうえお作文で自然と笑顔になりコミュニケーションが取れたりしたと思う。無理に自分の紹介をするよりも話やすく、物語づくりは大人数になっても楽しめるのでいいなと思った。
- ・ 初めて会った人たちだったのに、ニックネームで呼び合うことで話しくなった。
- ・ 学校では行ったことがないような活動を行って、最初はコミュニケーションが取れるのか不安で仕方なかったけど、活動をするにつれて仲良くなれたことがうれしかったです。また、言葉をつなぐために考えようと頭をたくさん動かしたので、すごく頭の体操にもなりました。

[国際理解ワークショップ]

満足度

(人)

満 足	21
やや満足	2
やや不満	0
不 満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 改めてSDGsについて理解を深めることができ良かったです。そして、自分の知識を得ることだけでなく、自分の持っている知識・考えを“伝える”ことも大切だと学ぶことができました。
- ・ 自分の知らない国際協力の内容がたくさんあり、JICA の活動がとても魅力的に感じた。S-1 グランプリもパートナーの子とたくさん話し合い楽しめた。

- ・ 初めて漫才をした。初めて会った人と話すのはとても緊張したけど、相手の人が意見を出してくれたり、改善点を考えてくれたりと率先して行動してくれたおかげで自分も動くことができた。SDGsを使った「漫才」なら、みんな興味を持ってくれるきっかけになると分かって、学校でもSDGsと何かワクワクすることを繋げた取り組みがしたいと思った。
- ・ 来る前は真面目にSDGsについて考えを深める活動を想像していたのですが、ペアを組んで漫才するという予想外な活動ですごく驚きました。でも、ほかのペアの漫才をきいて楽しくSDGsについて学ぶことができて良かったです。

[JICA 海外協力隊活動計画づくり]

□ 満足度

(人)

満 足	20
やや満足	1
やや不満	2
不 満	0

□ 感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ JICA 海外協力隊になりきってバリボ村のコミュニティ開発についてグループで協力して考えることができました。考えれば考えるほどいろいろな問題点が上がってきて、悩むところもありましたが、本当に貴重な時間でした。
- ・ 土地の問題点はいくつも上げることができるけど、いざその解決策って言われたら、根拠をもって導き出すのも難しかったし、その解決策の妥当性を考えたら適していない案もたくさんあってたくさん頭を悩ませました。しかし、その分、班のみんなでたくさん話あったので交流は多くできました。
- ・ 隊員さんの活動を詳しく聞いた後に、いざ自分たちで何をするか考えてみて、まず思ったのは、何をすればいいかわからないということでした。また、現地を実際に訪れてみないとわからないことが多かったことに驚きました。自分のグループは、問題が一つ見つかるとそれに連なって別の課題が見つかり、何に絞るか苦戦しました。
- ・ 優先順位を決めることがすごく難しかったです。日本とのギャップに驚きました。でも、先輩たちが話し合いをうまく進めてくれて良かったです。
- ・ 自分では発想できなかったような意見がたくさん出てきた。
- ・ 実際に現地に行っているような感覚で進めるのはとても難しい。問題はたくさんで、その解決方法が思いつかないことが多々あり、難航して、想像よりとても難しいと改めて実感した。

[国際交流パーティー]

□ 満足度

(人)

満 足	19
やや満足	2
やや不満	0
不 満	1
無回答	1

□ 感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 今の日本にはない海外の文化などを見て、実際にこんな文化もあるんだということを知ることができた。また、今日だけではなく、ほかにも様々なことが学べると思うので学びたい。
- ・ 訛りのある英語に触れる機会が、あまりないのでとても新鮮で勉強になった。
- ・ 英語力がまだまだ足りないと再度痛感した。しかし、人と話したり、コミュニケーションをとったりするのが好きなので、周りの人と協力しながら楽しむことができた。また、実際に現地の人のお話が聞ける機会はないのでいい経験になった。
- ・ せっかくの英語でコミュニケーションが取れる時間なのに時間が短く話したりなかった。

□ 今日の感想や新しく知ったこと、もっと知りたかったこと、第2日目のプログラムに期待することなど、1日目を振り返って自由に書いて下さい。

- ・ 始まったばかりの頃は、不安が大きかったが、気を抜いて楽しめるようなプログラムを用意してくださったおかげで、すぐに和むことができた。本当に濃い一日だった。明日でプログラムが終わってしまうのが本当に残念だ。学校に戻ったら、先生や友人に今日得たものをたくさん共有したい。
- ・ 初対面の人と交流するということが楽しみでもあり、不安でもありと複雑な気持ちで1日目を迎えました。参加している他県の高中生や職員の皆さんがとてもフレンドリーで緊張も和らいで、達成感などを味わったりできました。2日目もたくさん交流できることが楽しみです。
- ・ もっと JICA のこと、異文化に対して見解を深めていくことで、今の自分にはないより積極性を持つ自分を見つけていくことができると思った。
- ・ これからもっと積極的に海外のことを考えたり、SDGs について何ができることはないかと友人や家族と考えていきたい。
- ・ 発展途上国で起きる様々な問題に、日本もかかわっていくことが大切だと感じた。考えるだけでなく行動（アクション）を起こすという言葉が印象的だった。
- ・ 自分から話したり、行動することが改めて大切だと思った。

2日目（生徒用） 回答者数 24 名

[JICA 海外協力隊活動計画発表、振り返り]

満足度

(人)

満 足	21
やや満足	3
やや不満	0
不 満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 同じチームの人たちと一生懸命考えお互いのアイデアを出し合いながら頑張れました。発表の方法を考える際も、ありきたりに発表するのではなく、劇やインタビューを取り入れることにし、昼休みの時間も使って練習に取り組みました。
- ・ グループの人と一緒に様々な意味を出し合いながら、計画づくりを行うことができた。賞はもらえなかったが、自分たちなりに一番自信のある計画が立てられた。他グループの様々な技巧の凝らされた発表におおいに刺激をうけた。
- ・ 初めて会った人たちと短い時間で、海外協力隊の活動計画を作成するのは不安が大きかったですが、他の班の発表を聞いたり、発展途上国の現状を調べたりして、たくさんのことを学ぶことができてよかったです。でも、他の班に質問できなかったり自分から積極的に発表できなかったのが、少し後悔しています。これからはがんばります。
- ・ 妥当性や実現性の面では、とても良い内容であったと思う。だが、ポスター作成に時間がかかってしまい発表時間を大幅に削ってしまったので、表現力などという面であまり工夫ができなかった。
- ・ 自分とは異なった意見が聞けました。自分は悪い面だと思ったことでも、ほかの人にとってはいい面でもあることなどの見方が知れて、とても楽しかったです。

2日間を通して、このプログラム全体の満足度は_____パーセント（%）

(人)

100%以上	15
90-99%	7
80-89%	2
79%以下	0

満足度の理由

【100%以上】

- ・ 2日間を通して、本当にたくさんの刺激を得ることができて、これからの様々なこ

とに対するモチベーションの向上にもつながりました。また、ほかの人のプレゼンを見て学ぶことがたくさんあったので、それを校内の文化祭で行われる活動報告の場で、発揮したいと思います。(100%)

- ・ 自分にないものを得ることができたのと同時に、自信がついた2日間になった。一つ一つのプログラムの内容も濃く、色々な角度から国際協力やSDGsについて考えることができ、非常に面白かった。また、仲間と一つのものを作り上げることの難しさと面白さを改めて感じる事ができた。学校では体験できない、充実した2日間だった。(100%)
- ・ このプログラムで取り組んできたすべての活動が、自分にとってなじみのないことで、成長につながったと思えるからです。また、私はどの活動にも全力で取り組めたので、完全燃焼できていたと思います。(100%)
- ・ 自分の価値観が広がり、発展途上国への先入観が変わりました。また、各国の料理をたくさん食べることができてとても楽しかったです。SDGsや国際協力について今まで以上に知識を身につけ、考え方が広がったなと感じることができました。(100%)
- ・ 他県のいろんな人と交流することができて良かったです。各国の伝統的な料理を知れたこと、言語・文化に触れることができたこと、普段交流する機会があまりないような国の方とも交流できたので良い刺激になりました。(300%)

【90-99%】

- ・ 様々な活動を通して、ほかの高校の人たちとも交流を深めることができて良かった。そのほかにも JICA 研修員との交流会で異文化に触れたことがとても勉強になった。また、活動計画作成で実際に支援策を考えることで、国際協力のあり方について改めて考えることができ、今後の学習に生かせる内容だった。(95%)
- ・ お互いに助け合いながら課題に取り組んだり、他校の生徒とも交流を深めることができました。また、人前で何かを発表することが苦手な私にとって、この2日間のプログラムを通して苦手意識を解消するまではいきませんでした。自信をもって堂々と発表できるようになりたいという思いが強くなりました。(95%)
- ・ 他県の高校生と交流することで自分に足りないところや、自分の長所がわかったし、研修員の方との交流や2日間のプログラムを通して少しでも成長することができたと思うから。今までは発表や人前に立つことが苦手だと思っていたけれどやってみると案外楽しくて自信をつけることができたから。今までは校外で活動することが少なかったので自分が何をどれだけできるかがわからなかったけれど意外とやってみるとできることがたくさんあり、苦手なことに挑戦するいい機会になったため。もう少し時間があれば研修員の方との交流をしたかった。(90%)

【80-89%】

- ・ たくさんの方と体験し、自分自分の成長につながるたくさんの学びを吸収できた。もう少し、国際交流員の方と英語で交流したかった。他校の生徒の方々とももう少し交流できればと思った。(85%)
- ・ 普段、学校で体験することのできない活動ができて、とてもよい経験になりました。

慣れない人とコミュニケーションをとる方法や役割の分担など、社会にでてからも使える大切なことも学ぶことができ、本当に参加することができてよかったです。でもなかなか積極的に話せなくて少し後悔が残ったので、80%にしました。(80%)

□ 一番印象に残ったプログラムは何ですか。その理由を記入してください。

(人)

JICA 海外協力隊活動計画発表	12
JICA 海外協力隊活動計画づくり	6
国際交流パーティー	3
S-1 グランプリ	2
全部	1

【JICA 海外協力隊活動計画発表】

- ・ 私はもともと、海外協力隊の活動に興味があってこのプログラムに応募したので、この活動が一番印象に残りました。プログラムの中で最も難しいものだったと思うのですが、発展途上国についてたくさん知ることができた、本当に良かったです。
- ・ 他校の生徒のアドリブや説得力、語彙力、適応力に驚き、自分の力不足や経験の少なさを実感できたから。グループの人と協力して、よいものを作り上げることができたから。
- ・ 自分が実際に JICA の一員になった設定で体験することで、自分にできることを考えるきっかけになり、人のために行動する時に大切なことはなにか知ることができたからというのものもあるけれど同じ班になってくれた人たちの影響もあると思います。面白く聞きやすく発表してくれる人、たくさん調べてくれる人、客観的にみた意見を言ってくれる人、自分には飛び抜けた才能がないけどみんながいてくれたから自分なりの最大限で頑張れました。ここまで温かい関係になれると思っていなかったのですごく楽しかったです。
- ・ やはり活動計画作成が一番印象に残っています。インドネシアの村を支援するという設定で、極端な言い方をすれば、最初は無いものを与えればいくらいい考えだったのですが、支援をするうえで村の現状（課題と良さ）を洗い出し、村人のニーズを十分汲み取ったうえで支援内容を考えなければいけないことを学び、自分の考えの甘さを痛感しました。さらに、支援の内容によっては村の伝統や文化を壊しかねないため、そのことにも留意しなければいけないことを今回の研修で学びました。
- ・ 自分とは違った意見を持っている人たちがいることを知れたから。

【JICA 海外協力隊活動計画づくり】

- ・ 現地の人が必要としていることなのか、生活に影響はないのかなど考えるべきことはたくさんあったけれど現地の人役に立てるように考えるのが楽しかったから。また、今まで想像していたよりも1つの村に様々な問題があるとわかり国際協力について改めて考える機会になった。他にも、コミュニティ開発について、実

際の活動方法についても知ることができてこれからのことを考えやすくなったと思うから。

- ・ 自分にとってあまり関係がないと思っていたことに対し、自分事として、身近にできることを考える良いきっかけになった。仲間と意見を交えながらいろいろな視点から国際理解を深めることができた。
- ・ とても実践的で、実際に活動している方が感じていることを味わうことができたからです。一つ一つの問題が簡単に解決できるわけではなく、それぞれが影響しあっているので解決が簡単じゃないんだなと思いました。

【国際交流パーティー】

- ・ 普段の学校生活では、出会えないような様々な国の方々と交流できたのは貴重な体験でした。また、夕食もお品書きに丁寧に国の料理の説明が書かれていて、とても興味深いものでした。
- ・ このプログラムに参加させていただくにあたって、学校でほかの国の料理を調べ、聞きたいこと考えたり力を入れていました。結果として、自分の伝えたかったことは伝えることができ、また、一番このプログラムで思い出になったのは、みんなでゲームをしたり、その国のことについてポスターにまとめ、発表したことで研修員がほめてくれたことです。
- ・ 研修員の国の言葉も教えてもらえたとし、英語での会話もとても楽しかったから。

【S-1 グランプリ】

- ・ 漫才をするというのが衝撃的過ぎて一番印象に残っている。漫才はとても効果的だと思った。まず、漫才を作るためには相方と仲を深めなければならない。まだ、出会って1時間ほどしか経っていない相手と作るためにたくさんコミュニケーションをとることができた。また、漫才を作るということは、私たち自身がSDGsのことをしっかりと理解しておかなければならないので、事前に配られていた冊子をより深く読んだり、より深く考えたりできた。そして、聞き手側にも楽しみながらSDGsについて知ってもらうことができる。とても魅力的な発信方法だと思った。
- ・ 私は今までお笑いやふざけることをするような人柄ではなかったので、初めはとても緊張していました。ですが、相方とネタを考えたり練習したりしているうちに、楽しいと思えるようになり本番でもしっかり発表できたことにすごく達成感がありました。そして、この経験を通して、自分の新たな一面を知ることができたからです。

【バリボ村発展への仮案】

- ・ 実際、自分が海外協力隊員になったという設定で、バリボ村の悪い点を改善し、良い点をもっと伸ばし生かしていくという難しい課題に、お互い知らなかった他校の人たちと取り組めたことが初めての経験で、コミュニケーションや協力することの大切さを改めて感じたから。

【全部】

- ・ 全部いいプログラムで選べないから

□ 最後に何か書きたいこと、伝えたいことなどがあれば自由に書いて下さい。

- ・ 貴重な体験をさせていただきありがとうございました。私は人前に立つと緊張し、台本をよむので精一杯になってしまうのですが、今回他県の方のプレゼン力を目にして、もっと瞬発力を身に付けて発表する力を身に付けようと思いました。
- ・ この2日間で苦手だと思っていたことでも案外やってみると楽しくて意外とできることが多く、自分が変わったと感じたこともあったし、ほかの高校生と交流することで校内ではできないような発見があって、とても楽しかった。
- ・ 参加した全員がお互いを尊重している良い現場でした。

1 日目（教員用） 回答者数 7 名

1. 各プログラムの感想・意見・改善点などをご自由にご記入ください。

【学校紹介・アイスブレイク】

- ・ 最初は生徒たちも緊張していましたが、楽しいゲームで自然と発言もするようになり、あっという間にグループのほかの方々のニックネームを覚えたようです。若い人たちの発想力に感心しました。
- ・ 感染対策等をしつつ、アクティビティされていて勉強になりました。
- ・ SDGsをテーマにした漫才をしたことで参加生徒たちはお互いに打ち解けて仲良くなれたと思います。また、生徒たちの発想の豊かさに驚かされました。とても楽しい時間でした。
- ・ ネームトスで、グループ分けした際「～さん」と言っていたので、ニックネームに“さん”をつけなくてよいという指示を出したほうがお互いの心の距離が近づいて良かったかと思いました。

【国際理解ワークショップ】

- ・ “知る→する→伝える”の行動パターンの最後の“伝える”が大切だと改めて感じました。
- ・ まさか、漫才をすることになるとは思いませんでした。しかし、漫才を通して今一度、SDGsの目標を知り、自分たちが漫才の中の日常生活にその言葉を落とし込むことで、身近なところから我々もアクション」が起せるということに気づいたのではないかなと思います。そして、こうやって楽しい人に伝える方法があるというのも学びになったと思います。
- ・ 漫才というアイデアが面白かった。
- ・ おそらく多くの生徒にとって、漫才をするのは初めての経験だったと思います。自分の殻を破らなければならない生徒もいたでしょうが、それぞれ協力し合って、お互いを補いながら取り組んでいる姿が見られました。私では到底考え付かない方法でしたが、生徒たちの秘めた力を引き出す興味深いワークショップであったと感じ

ています。

[JICA 海外協力隊活動計画づくり]

- ・ 自分の学校で半年以上かけてやることを2日で取り組む生徒たちに驚きます。だからこそ、深め広げていく道を考えていこうと思います。導き方、勉強させていただきました。
- ・ フォトランゲージやダイヤモンドランキングなどグループ活動で効果的な手法について学ぶことができました。活動計画づくりはチャレンジングでしたが活動後半に、実際に東ティモールに駐在されていた調査員の方から直接お話を聞いたり質問することで、リアリティが高まったと思います。
- ・ 海外協力隊員としてのお話はとても興味深かったのですが、1対全員というクラスルーム形式よりも、1対少数・多グループ形式のほうがいいのではないかと思います。少数のほうが、生徒は集中できますし、ざっくばらんに質問等もできるのではないかと思います。5名の経験者がいらっしやっただけで可能ではないかと思いました。
- ・ 目的、場面、条件が細かい資料により明示されていたので、生徒にとってはゴールイメージがしやすい活動であったと思います。

[国際交流パーティー]

- ・ アイスブレイクからのグループ別活動への移行がスムーズにできていた。グループ内の活動もうまく構成されており、充実していたと思う。研修員ごとの個性に触れられる国際理解を深めることができていた。
- ・ 私たち教員はもちろんサポートできましたが、生徒たちの貴重な経験を奪わないように見守ることも大切だと改めて、感じました。
- ・ 様々な国籍の研修員との交流を通じて英語を学ぶ意義・目的を再確認することができました。また、生徒たちは、普段、英語圏の方と交流することが多い中、アフリカや西アジアの国々の方々との交流は大変貴重な経験となったはずです。
- ・ 時間の都合もありますが、お一方ではなく、お二方ほど交流できるともっと良かったかなと思います。

[その他]

- ・ 事前学習の内容が最後の活動までつながっていたことがとてもよかったと思います。生徒たちは興奮した様子で、どんどん書き込みをしていました。
- ・ 1日目が終わるころには、緊張していた生徒たちも、いろいろな体験活動のタスクをこなす中で、話し合う、協力し合う大切さを学び、課題解決に向けてもっと深く考えるという経験もできて、喜んでいるようでした。

2日目（教員用） 回答者数 7名

1. 各プログラムの感想・意見・改善点などをご自由にご記入ください。

[JICA 海外協力隊活動計画発表、振り返り]

- ・ 討論、まとめ等は学校でも実施するが、他県の生徒と交流できて、日ごろでは見ない表情を見ることができて良かった。
- ・ 学校単位でなく混成チームによる計画作成・発表で、他校生と交流したり刺激し合えたのがとても良かった。他者と協力して一つのことに取り組むことの難しさを乗り越え、新しい視点やアイデアを共有できたのではないのでしょうか。また、海外協力隊員としてインドネシアの村に着任するという設定は活動計画作成という活動のリアリティを高めるのに効果的だったと思います。
- ・ 発表前の計画を練る間の過程で、ほとんどの高校の生徒たちが、前日よりさらに、活発に意見交換をしあい、仕上げていく様子を見ていて、とても感動しました。また、教員自身も同じ課題を考えることで、子供たちの視点がどこに置かれているのかに気付いたり、結構洞察力があるのだなと考えさせられたり、大変勉強になりました。
- ・ 1日目に引き続き、活動を行いましたので、活動についてはどのグループもスムーズに行えていたと思います。先生チームの活動も同時に行うため、先生同士の学校での活動の情報交換の時間があまりとれずに残念でした。

2. 2日間を通してこのプログラムの満足度は_____パーセント

(人)

100%以上	3
90-99%	4
80-89%	0
79%以下	0

理由：

- ・ 生徒たちのやる気を引き出すのは、教える側にあると思います。その意味では今回各県デスクの皆様、JICA のみなさまの熱い気持ちが生徒に伝わり、入念に準備されたおかげで生徒たちにとって、また私にとっても貴重な経験となりました。(100%)
- ・ 終わったときの生徒の表情が輝いていました。生徒の感想では、あと数日間体験をしたかったという意見がありましたので、もう少し体験期間が延びれば100%でした。(90%)
- ・ 趣向を凝らした実践的なプログラムを準備していただき満足しております。欲を言えば、引率教師がすべての研修を生徒と一緒に受けるのではなく、一部は指導者養成講座のような教員向けの研修があっても良かったと思います。(90%)

3. 全体の流れ、時間配分は適切でしたか？

(人)

とても良かった	5
良かった	2
あまり良くなかった	0
良くなかった	0

理由：

【とても良かった】

- ・ メインの活動である計画作成に十分時間を設定していただいて生徒たちもじっくり取り組めて良かったと思います。
- ・ 最後の振り返りまで含めて、活動計画に向かって、自然な流れで、活動の意味や方法を学べて、大変良かったと思います。
- ・ 伝えたいこと、やってほしいことが明確だった

【良かった】

- ・ 少し、活動計画の時間が短かったように思います。問題点を探し出すプロセスなどは分かりやすくよかったです。
- ・ 盛りだくさんの内容を分刻みで対応いただいて感謝しております。準備から運営まで本当にありがとうございました。
- ・ 適度な休憩とプログラムの内容、時間配分

4. 来年度の高校生国際協力実体験プログラムに向けて、改善点をご記入ください。

- ・ もしよければ、留学生との交流をもう少し多めに。
- ・ 1日目に各学校での国際協力や国際理解に関する取組について発表する時間があったても良かったと思います。
- ・ 生徒同士の学校の情報交換がもっとあってもよかったですかと思ひます。
- ・ 3泊4日程度のプログラムにしていただけると、生徒同士の結びつきや、活動内容が深まると思ひます。
- ・ ぜひ、このままの情熱で続けてくださいますようお願いいたします。
- ・ 難しいかとは思ひますが、あともう少し、国際交流員の方々と交流する時間があればと思ひました。
- ・ JICA九州に他にどんな職員がいて、どのような取組をされてきたのか知りたひです。

5. 今後、事後学習として取組みたいこと、生徒たちと進めていきたいことをご記入ください。

- ・ 持続可能な社会を作る力といつかなるようひ、学校でできることを生徒とともに考え、次の学年につなげたい。

- ・ エッセイコンテストへの応募は行いたいと思います。また、夏休み期間中の生徒活動報告会を学年主催で行う予定です。また、今後、講座制の課外授業で希望者を募り、JICA 研修員との交流会などを活用していきたいと考えています。
- ・ JICA の出前講座を利用して国際協力ワークショップを校内で実施する。
- ・ 学校の文化祭で発表する。

6. JICA の開発教育支援にどのような役割を期待しますか。

- ・ 今回のような学生を対象としたプログラムを今後とも是非とも継続していただければと思う。一般的な学校において開発教育を熟知した者は非常に少ないと思われる。外国語科の教員に必ずしも留学経験があるとは限らないし、英語圏に限定された文脈になってしまうことも多いと感じる。やはり第一線で活動されている JICA 職員からのリアルな声は大いに刺激的で勉強になった。
- ・ これからも出前講座などのオンデマンドによる学校における教育支援に期待しています。
- ・ 今回の実体験プログラムのように、異なる高校の生徒同士が寝食をともにしながら多文化理解や国際協力について学ぶ機会が増えることを希望します。

